

第93回麻布獣医学会 一般学術演題5

X線一般撮影装置を用いた歯科レントゲン撮影の一考察

○松本 智

まつもと動物病院

I. はじめに

日常の診察において歯周病は良くみられる疾患の一つであるが、歯の状態は外観や、無麻酔下での観察だけでは判断が困難な場合も多く、歯牙の温存の可否はレントゲン撮影にゆだねられる場合も少なくない。また、中高年齢期に発生することが多く、腫瘍性疾患など歯牙疾患以外の疾病との鑑別も重要となる。しかしながら歯科領域のレントゲン撮影には専用の装置が必要であったり、撮影方法が特殊であったり、その撮影自体に大きなハードルが存在する。そこで今回、大きな設備投資なく実用的な歯科レントゲン撮影を行う方法を模索し、一定の成果を得たので報告する。

II. 材料および方法

レントゲン発生装置は開業時に導入した小動物用のもので、一般に広く普及しているものを使用している。術前には頭部レントゲン写真を撮影し、顎骨を含めた歯牙全体の評価に用いている。吻尾（頭部斜位）方向の撮影は歯牙疾患以外の検出に大きな威力を発揮してくれることがある。歯牙の撮影はF感度一般用デンタルフィルムを用い、麻酔下で開口し、二等分面法または平行法を用いて撮影を行う。専用の自動現像機を使用すると感度が低下せずに現像が可能である。感度はやや低下するが現像定着液注入式のデンタルフィルムセットも有用である。デンタル

フィルムのレントゲン出力は撮影距離に大きく左右されるため施設ごとの調整を要する。成書では歯石除去後の撮影が推奨されているが演者は必ず歯石除去前に歯牙撮影を行っている。歯冠部のない部位でも歯根部が残存していたり、埋伏歯が存在していたりすることがあるため、必ず複数枚を使用し顎全体の撮影を行っている。

III. 成績

健常歯と、歯牙・顎骨に疾患のある症例をご紹介します。この発表では、レントゲン撮影上、歯根や歯根膜に異常を認めないものを健常歯とした。

IV. 考察

近年『安全な無麻酔歯石除去』などと称して歯科治療を行うペットサロンが増加している。飼主の麻酔に対する抵抗感は理解できるが、破折を招いたり抜歯のタイミングを逃して重症化させてしまったりする事態は容易に推察できる。われわれ獣医師はただ単に歯石を除去するだけでなく、麻酔下で撮影したレントゲンを飼主にお見せすることで無麻酔では不可能な説得力のある処置が可能である。

撮影精度は歯科用装置を用いることが最良なのはいうまでもないが、通常のレントゲン発生装置を用いても診断に必要な十分な写真を簡便に撮影可能である。

この発表が歯科レントゲン撮影を活用していただく一助となれば幸いです。